

今村欣史

承前。

玄関を入ったすぐそこに、もう書架がある。案内されるどの部屋にもおびただしい書籍がある。

先生の書齋は二階。窓から南西方面が見渡せる。

初美さんは「以前はもっと見晴らしがよかったですけどね」とおっしゃる。

「春には近所の邸宅の庭の桜がきれいに咲きました」と。

遠くには中山寺も見えて、新しく建ったケバケバしい多宝塔が家並みの向こうに望める。



先生には不評だったようだ。わたしもそう思う。

書架の本はある程度は初美さんが片づけられたというところで、ところどころが空いている。

しかし、大量の本だ。

「書齋を他人に見られることは恥ずかしいことだ」とおっしゃっていた先生、写真掲載お許しを。



宮崎翁の書齋も凄かったが、当然ながらまた様子が違う。並ぶ本の種類が大きく違う。

宮崎翁は言葉関連が主。杉山先生は、やはり

詩集などの文芸書、そして映画関係、さらに哲学書、思想書などが多い。わたしの目を引いたものに竹中郁さんの貴重な詩集もあった。ほかに先生お気に入り田木繁の全集がある。これは、わたしに「お貸ししますよ」と言ってくださっていた本だ。



もう昔のことだが、わたしは三年間、従業員10人ほどの町工場に勤めたことがある。経理として入った会社だったが時には機械も操作した。その体験から生まれたのが、詩集、『工場風景』（私家版）。それを読んでくださった先生は「わたしは機械が好きなので、ほめ過ぎかもしれませんが」と高く評価して下さり、いろんな詩人や作家を紹介して下さった。それは今もわたしの財産になっている。そして読むことを薦めてくださったのがこの田木繁だった。田木には『機械詩集』という

詩集があり、わたしの詩に通ずるものがあつたのだ。

昔の同士に出会ったような気がして懐かしく、思わず本の背を撫でていた。

ほかに目についたものに、わたしが生涯尊敬してやまない足立卷一先生の著書や、小野十三郎さんのものなど。さらに、わたしの最初の著書、口頭詩集『ライオンの顔』『きよのパーテイ』を贈るように紹介してくださった、まど・みちおさんの署名献呈本も多数。

その中でちよつと驚いたのが、小田実さんからの献呈本だ。

「あなたの愛読者です」といった意味の添え書きがあつたのだ。杉山先生とは接点がないような気がわたしはするので、意外だった。

つづく